



# 京大広報

No. 664

2011.2



京大生がつくるキャンパスマップ「Welcome!京大」  
(大西理事とプロジェクトチームのメンバー)  
—関連記事 本文3373ページ—

## 目次

理事就任後の活動報告 学生担当理事・副学長 赤松 明彦	3360
〈大学の動き〉	
平成22年度情報教育研究集会および 大学 ICT 推進協議会設立総会を開催	3362
第9回 AEARU Web Technology and Computer Science Workshop を開催	3363
ヴィクトル・フェドロヴィチ・ヤヌコーヴィチ ウクライナ大統領が京都大学を訪問	3363
平成23年度入学者選抜学力試験 (個別学力検査)の志願状況	3364
平成23年度概算要求内示概要	3365
〈部局の動き〉	
宇治地区新年互礼会を開催	3366
〈寸言〉	
京大で学んだこと 土屋 裕弘	3367
〈随想〉	
『日中教育学対話』シリーズ3巻の出版 名誉教授 山崎 高哉	3368
〈洛書〉	
過去から繋がる現在, そして未来へ: 宇宙も自分も 長瀧 重博	3369

〈話題〉	
東南アジア研究所において東南アジア10カ国の ASEAN 常駐代表と山田 ASEAN 担当大使との 意見交換会を開催	3370
平成22年度日本学術振興会拠点大学交流事業 「都市環境」コーディネーター会議を開催	3370
FDのためのビデオ教材「FDを“やる”から “発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」 を開発	3371
第3回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を 開催	3372
経営管理大学院が講演会「会計検査院の仕組みと 機能」を開催	3372
京大ベンチャーズ「スタートアップ研修会」 ーベンチャー成功の条件を考えるーを開催	3373
京大生がつくるキャンパスマップ 「Welcome! 京大」配布開始	3373
〈訃報〉	3374
〈グローバル COE プログラム紹介〉	
地球温暖化時代のエネルギー科学拠点 ーCO2ゼロエミッションをめざしてー	3375

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 理事就任後の活動報告

学生担当理事・副学長 赤松 明彦

昨年10月1日付けで学生担当の理事・副学長を拝命しました。学生支援・学生支援施設・留学生にかかわる諸事を特命事項としています。学生(以下では、学部と大学院の学生・留学生を一括して等しく「学生」と言うことにします)担当の理事としての課題は、学生寮や留学生宿舎の整備をはじめとした学生の福利厚生施設の充実に努めること、学生が学業とともに課外活動にも懸命に取り組むことができる諸々の環境を整備すること、学生が安心して勉学できる経済的な支援を確保すること、学生が抱えるところやからだの問題に柔軟に対応するケア体制を保証すること、そして学部学生からポスト卒までそれぞれのキャリア形成に応じたきめ細かな就職支援の体制を作ることです。これらの課題に対しては、西村周三前理事・副学長、さらにはそれ以前の歴代の厚生補導担当副学長によってしっかりとした基礎が築かれてきましたので、私は、それらを土台としてその上を着実に踏み固めて進んで行くつもりでいます。

理事・副学長となって、はや5ヶ月が過ぎようとしています。この間の自分の生活の激変に我がことながら驚いています。文学研究科で評議員・副研究科長を2年間務め、昨年4月からは文学研究科長となっておりましたが、それでもまだ自分の研究室の学生を相手に教育を行い、専門の研究を日々継続することを本務としているという意識が強くありました。理事・副学長として京都大学本部の業務を担うことは、それとはまったく違うものであるということ今ようやく理解し始めたところです。ここでは、理事就任後に起こった出来事について、日時を追いながら報告することで、理事としての活動をいま一度自分でも反省してみたいと思います。

話を昨年9月30日から始めなくてはなりません。松本 紘総長からの辞令交付を翌日にひかえ、少し気が高ぶっていたのかもしれませんが。普段よりも遅



めの家路でしたが別に酒を飲んでいただけでもなく、また過度に疲れていたわけでもなかったのですが、あと50メートルも歩けば我が家というところで、何かに蹴躓き足をとられ、受け身もでき

ず手で支えることもできないまま、前のめりに倒れました。ほの暗い街灯がひとつ離れて点いていましたが、まわりは暗闇でした。あごをしたたかに路肩のコンクリートに打ちつけ、「しまった」と思ったのですが、すぐに起き上がって再び歩き出すことができましたので、まずは大丈夫と判断しました。膝も、足も、腰も痛くもなく動いています。しかしどうもあごから首すじのあたりの様子が変わります。手をやると「なんじゃこりゃあ」でした。まさかここで松田優作になるとは思ってもみませんでした。帰宅したものの、病院にすぐ行けという妻の指示を受けて近くの病院へ直行しました(自転車で。自動車は運転できません)。幸い、外科の若い研修医が夜勤をしていたので、すぐに手術をしてもらうことができました。大学入学以来病院に行ったのも医者にかかったのも、人間ドックを除けばこれが初めてです。ともあれ、この転倒で、何かを確かに吹っ切った気がしています。はからずも激烈な喝をくらったと言うべきでしょうか。

10月1日。下あごに分厚く絆創膏を貼付けて、総長から辞令をいただきました。遠目からは髭を生やしたようにも見えたいのですが、私自身はかえって開き直ったような感じで落ち着いていました。新任の理事、副理事に対する総長からの訓示は、理事としての責任の自覚を促されたものでしたが、私には、目指すべきものを見失っているかのような学生たちに対して、いかにして目的意識をもたせるか

という課題を与えられたもののように聞こえました。

理事となって本格的な活動を開始したのは、翌週10月4日の月曜日からです。秋田への出張でした。秋田ビューホテルで、第31回全国国立大学学生指導担当副学長会議というものがあったのです。全国86の国立大学法人から学生担当の副学長や理事などが集まり、学生の生活支援や就職支援に関して各校の取り組みなどを話し、意見交換する場だと聞いていました。文部科学省高等教育局の学生・留学生課長による来年度の大学関係予算案の概要と文科省の取り組みについてのお話もありました。来年度予算10パーセント減という大枠が示された後のことで、文科省からの「要望」項目などについてもかなり詳しく話されたはずですが。もっとも新米の理事としては、このような場所で何を聞いてくるかのツボがまだわかっていませんでした。感心したり、驚いたりしながら各大学の取り組みをメモしたりはしました。他大学の先生がたとの情報交換もしました。しかし、課長の講演で配られた大部の資料については、たいして注意を払わないまま帰ってきました。ところがその中には、後に大騒動となった国費留学生に関連する予算の減額についても、「キャンパスアジア構想」などとともに、ちゃんと書いてあったのです。こういった場での文科省からの話には耳をすまし、資料も細大漏らさずチェックすること。これがこの時に得た教訓です。

理事には、セレモニーに出席するという役目もあります。挨拶をしなければならないこともしばしばです。いまだにこれには慣れません。留学生担当ということもあって国際シンポジウムでの英語の挨拶というのがあります。就任早々の10月15日に、「日台共同シンポジウム－気候変動適応策に関わるリスクコミュニケーションと防災教育」という地球環境学堂主催の会議で挨拶したのを皮切りに、医学部学生会館竣工式(11月14日)、西部課外活動棟オープニング式(11月26日)、京都大学能楽鑑賞会(12月8日)、イスラーム地域研究第3回国際会議(12月17日)、文学研究科国際シンポジウム(12月18日)など種々あり

ました。

セレモニーではなく、きちんとご挨拶しなければならないこともあります。能楽鑑賞会では、終演後のお礼の挨拶をすべく控えの部屋に行くと、人間国宝の片山幽雪(九世片山九郎右衛門)さんがおられてどぎまぎしてしまいました。能楽鑑賞会は、京大の学生・教職員のための課外教養行事として学生部が毎年開催しているものです。その開会の挨拶でも申し上げたのですが、この九世片山九郎右衛門さん、11月4日に亡くなられた茂山千之丞さん、8月18日に亡くなられた片山慶次郎さんらに、これまでも度々ご出演いただいております。この鑑賞会は、学生向けとはいえお能と狂言の超一級の会となっています。ちなみに今回の演目は、狂言「仏師」(茂山千五郎、茂山七五三)と能「葛城」(片山清司=十世片山九郎右衛門)でした。次回もきっとすばらしい上演がご覧いただけますのでご期待ください。

すでに紙数もつきています。学生担当理事、厚生補導担当副学長としては是非とも書いておかなければならないこととしては、他に「団交」のことと、学生の不祥事、薬物、飲酒にかかわることがありますが、後者は、機会をとらえてはくり返し注意喚起を行っているところですから、最後に「団交」について触れておきます。

吉田寮自治会、熊野寮自治会との話し合いや「団交」は、すでに数回もちました。中には吉田寮においてキムチ鍋で歓待されたり、熊野寮祭に参加したりもしました。熊野寮自治会とは、前任理事が交した確約を引き継ぐための団交が12月17日に行われ、更新するかたちで私のサインをしました。吉田寮自治会とも、前理事と自治会の双方が数ヶ月前にお互い苦勞して歩み寄った確約をそのまま引き継いで、老朽化著しい吉田寮の新寮建設に向けた話し合いに早急に入りたいと、私は思っています。他にもいろいろありますが、とにかく理事就任後に自分の世界が一挙に広がった気がしています。以上活動報告といたします。

## 大学の動き

## 平成22年度情報教育研究集会および大学 ICT 推進協議会設立総会を開催

平成22年12月10日(金)、11日(土)の両日、京都テルサにて本学主催の平成22年度情報教育研究集会が開催された。また、この研究集会に引き続き、同会場にて大学ICT推進協議会設立総会が開催された。

情報教育研究集会は、昭和63年の九州工業大学での開催以来、国立大学12校と放送大学(オプザーバ)で構成される国立大学情報教育センター協議会の参加大学が輪番で開催してきた。本学としては今回が三度目の主催である。今回の研究集会は、情報環境機構／学術情報メディアセンターが企画を担当し、高等教育研究開発推進センターおよび情報学研究科情報教育推進センターにセッションのオーガナイズなどで協力いただいた。また、文部科学省のほか京都府教育委員会および京都市教育委員会にも後援いただいた。

この研究集会には、例年500名程度の参加者があり、大学における情報教育と教育の情報化を扱う国内最大規模の研究集会としてFD(教員の授業内容改善)、SD(職員の職務内容改善)の貴重な場となっている。本年度の研究集会には約600名の参加があり、分科会・ポスターには153件の発表があった。

12月10日午前には「ICTを活用した組織的FD」、「大学間連携による教育学習支援情報環境の現状と課題」、「大学・大学院の全学共通情報教育と教育情報化環境」、「オープンコースウェアのインパクトと



長尾元総長による基調講演



淡路理事による開会挨拶

将来展望」をテーマに4件の企画セッションが行われた。同日午後には全体集会が開かれ、淡路敏之理事・副学長、中島浩学術情報メディアセンター長および来賓の今井裕一文部科学省高等教育局視学官の挨拶の後、長尾真国立国会図書館長(元本学総長)から「電子図

書館とデジタル教科書」という演題で基調講演をいただいた。講演の後、長尾元総長を囲んで「デジタル教科書の可能性」というパネル討論も開かれ、現在注目を集めている電子書籍や電子教科書についての議論を深めた。翌11日は朝からポスター発表や分科会発表が開かれ、情報教育と教育の情報化をめぐる、様々な研究や実践の報告と活発な討論が行われた。

情報教育研究集会は本年度で幕を閉じ、来年度からは新設された大学ICT推進協議会の年次大会がその機能を発展的に引き継ぐことになっている。

12月11日の午後からは「大学ICT推進協議会」の設立総会が開催された。大学教育の情報化あるいは情報教育の重要性は年々高まっている。しかしながら、大学間の連携は、これまで国立・私立など大学の設置形態や情報系センターの性格ごとに部分的なものに留まっており、我が国の大学全体での連携が求められていた。既に米国では非営利団体EDUCAUSEが大学間の連携活動を広く展開している。EDUCAUSEの活動などを参考に各大学が準備を進め、このたび本学を含む15大学が発起人となり、大学ICT推進協議会が設立された。

設立総会では、来賓の澤川和宏文部科学省高等教育局専門教育課長による挨拶の後、設立の趣旨説明、役員の選任、事業計画や会費などの議案が承認された。協議会会長には安浦寛人九州大学理事が、また、副会長には美濃導彦本学情報環境機構長が選出された。

設立総会に引き続き、EDUCAUSEの役員会・会長を務めるカナダ・ブリティッシュコロンビア大学の副プロボスト、テッド・ドッド氏により「コミュニティ形成とコラボレーション：高等教育の質的変革のために各大学のICT組織はどのように協働できるのか」という演題で記念講演をいただいた。本協議会への大学やIT企業の関心も高く、設立総会・記念講演には280名を超える参加者があった。

(情報環境部・学術情報メディアセンター)



ドッド氏による記念講演

## 第9回 AEARU Web Technology and Computer Science Workshop を開催

AEARU (Association of East Asia Research Universities: 東アジア研究型大学協会) は、東アジア地域を代表する大学連合で、日本・韓国・中国・香港・台湾の五つの国・地域から17の大学が参加しており、年間を通じて各地の加盟校で様々な分野の会議やシンポジウムを開催している。この度、情報学研究科が中心となり、百周年時計台記念館国際交流ホールにて第9回 AEARU Web Technology and Computer Science Workshop を開催した。このワークショップは、平成10年に京都大学で第1回が開催されてから定期的に行われてきた AEARU の中心イベントの一つである。

グローバルCOE「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」との共催で開催した今回のワークショップは、1月17日(月)・18日(火)の二日間に亘って行われ、6カ国・地域から34名の研究者・学生がスピーカーとして参加し、それぞれの研究について発表、意見交換を行った。東アジア地域におけるクラウドコンピューティングの現状を知る絶好の機会



松本総長による挨拶

となった本ワークショップは、基調講演や四つのトピックをテーマにした研究発表の他、博士課程学生によるラウンドテーブルといった多彩な内容が盛り込まれ、他大学の研究者、企業関係者からも数多くの参加者を得た。全体の参加者数は112名に上り、会場となった国際交流ホールは大変な盛況となった。

松本 紘総長および中村佳正情報学研究科長の挨拶で幕を開けたワークショップは、終始活気にあふれ、基調講演や各研究発表後には多くの質疑応答があり、休憩の間にも議論を行う様子があちこちで見られた。1日目の午後に行われた博士課程学生によるラウンドテーブルでは、12名の学生が二つの会場に分かれてそれぞれ自分の研究について発表し、同世代の学生が多く集まった会場は大いに盛り上がった。



参加者集合写真

(国際部)

## ヴィクトル・フェドロヴィチ・ヤヌコーヴィチ ウクライナ大統領が京都大学を訪問

1月20日(木)、ヴィクトル・フェドロヴィチ・ヤヌコーヴィチ ウクライナ大統領をはじめ外務大臣ら6名の方々が本学を訪問され、松本 紘総長、赤松明彦理事・副学長、吉川 潔理事・副学長、森 純一国際交流推進機構長、山中伸弥iPS細胞研究所長と懇談された。



ヤヌコーヴィチ大統領を出迎える松本総長と山中所長

まず、会場となったiPS細胞研究所玄関で松本総長および山中所長の出迎えを受けられた後、セミナールームにおいて懇談が行われた。続いて、iPS細胞研究について大変関心を持っておられるヤヌコーヴィチ大統領に対して、山中所長よりスライドを用いてiPS細胞やiPS細胞研究所の紹介があった。ヤヌ

コーヴィチ大統領は、ウクライナではiPS細胞研究がまだ緒についていないので、本学と交流を深め研究を進めたいと話された。

場所を講堂に移し、iPS細胞研究所の教職員や学生に対してヤヌコーヴィチ大統領によるスピーチが行われた。スピーチの中で、ヤヌコーヴィチ大統領はまず天然資源が豊富であるウクライナの経済発展の状況などを紹介され、続いて、本学での研究環境や将来性のあるiPS細胞研究について感想を述べられた。最後に日本の象徴であるサクラとウクライナの象徴であるチェリーの木が同じ園で咲くことを心から願うと締めくくられた。スピーチ終了後、ヤヌコーヴィチ大統領は、通路に立ってスピーチを聴いていた参加者一人ひとりと握手される中、大きな拍手に包まれながら退席された。



スピーチをされるヤヌコーヴィチ大統領

(総務部)

## 平成23年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の志願状況

2月25日(金)から27日(日)に実施される平成23年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりです。  
志願票の受付は、1月24日(月)から2月2日(水)まで、各学部で行われました。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 前年度最終				
				募集人員	志願者数	倍 率		
総合人間学部	前期	120 <sup>^</sup>	467 <sup>^</sup>	3.9	120 <sup>^</sup>	579 <sup>^</sup>	4.8	
	文系	65	262	4.0	65	340	5.2	
	理系	55	205	3.7	55	239	4.3	
文学部	前期	220	744	3.4	220	738	3.4	
教育学部	前期	60	216	3.6	60	232	3.9	
	文系	50	181	3.6	50	191	3.8	
	理系	10	35	3.5	10	41	4.1	
法学部	前期	320	861	2.7	320	876	2.7	
経済学部	前期	230	827	3.6	230	802	3.5	
	一般	180	560	3.1	180	575	3.2	
	論文	25	139	5.6	25	117	4.7	
	理系	25	128	5.1	25	110	4.4	
理学部	前期	311	930	3.0	311	892	2.9	
医学部	前期	250	648	2.6	250	605	2.4	
	医学科	前期	107	324	3.0	107	303	2.8
	人間健康科学科	前期	143	324	2.3	143	302	2.1
	看護学専攻	前期	70	143	2.0	70	143	2.0
	検査技術科学専攻	前期	37	101	2.7	37	81	2.2
	理学療法学専攻	前期	18	39	2.2	18	37	2.1
	作業療法学専攻	前期	18	41	2.3	18	41	2.3
	薬学部	前期	80	213	2.7	80	213	2.7
薬学部	薬科学科	前期	50	114	2.3	50	124	2.5
	薬学科	前期	30	99	3.3	30	89	3.0
工学部	前期	955	2579	2.7	955	2507	2.6	
	地球工学科	前期	185	573	3.1	185	485	2.6
	建築学科	前期	80	198	2.5	80	229	2.9
	物理工学科	前期	235	553	2.4	235	572	2.4
	電気電子工学科	前期	130	369	2.8	130	381	2.9
	情報学科	前期	90	269	3.0	90	221	2.5
	工業化学科	前期	235	617	2.6	235	619	2.6
農学部	前期	300	851	2.8	300	876	2.9	
合 計		2846	8336	2.9	2846	8320	2.9	

(注1) 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(注2) 工学部地球工学科の募集人員は、外国人留学生を対象とした国際コースのための選考による入学手続者4名を含む。

(学生部)

## 平成23年度概算要求内示概要

### 新規要求

- 1. 大学院文学研究科 文献文化学専攻 外 修士課程 △16人
- 2. 大学院文学研究科 文献文化学専攻 外 博士課程 △8人
- 3. 大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 修士課程 10人
- 4. iPS細胞研究所 教員5人分の人件費相当額
- 5. 特別経費

特別経費として新規9件、継続29件のプロジェクトが採択された。

部局名	事項(事業)名	新規・継続の別
<b>【プロジェクト分】</b>		
①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
薬学研究科	革新的ナノバイオ創薬研究の推進－国立・私立大学間 薬-工連携プロジェクト－	継続
化学研究所	統合物質創製化学推進事業－先導的合成の新学術基盤構築と次世代中核研究者の育成－	継続
経済研究所	先端政策分析研究推進事業－イノベーションの創出・活用により豊かな国民生活を実現する新経済社会システムの構築－	新規
霊長類研究所	人間の進化の霊長類的基盤に関する国際共同先端研究の戦略的推進－人間の本性と心の健康を探る先端研究－	新規
東南アジア研究所	ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開－東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化－	新規
iPS細胞研究所	iPS細胞研究拠点形成事業－iPS細胞の臨床応用に向けた取り組み－	継続
高等教育研究開発推進センター	大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成	継続
②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
教育学研究科	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業	継続
法学研究科	法科大学院制度下における実定法学後継者(法科大学院教員)養成のための全国的拠点の形成	新規
薬学研究科	横断的統合型教育による創薬・育薬力育成プログラム	継続
工学研究科	「安寧の都市」を創る高度融合型人材教育ユニット支援事業－地域社会の協働と共に成長する教育ステージの実現－	継続
情報学研究科	知識社会におけるイノベーション人材養成のための全学共通情報教育プログラムの開発・実施	継続
経営管理研究部・教育部	日本型高品質サービスのグローバル展開を担う人材育成プロジェクト－新たな成長を実現するサービス・イノベーション創出へ向けて－	新規
④大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
医学研究科	ゲノム医学を用いた地域疫学コホート事業－大学と自治体の連携による21世紀型の新たな健康づくりの試み－	継続
医学研究科 薬学研究科	ファーマコゲノミクスの確立に向けた先端的研究推進－ゲノム, EBM, トランスレショナルリサーチ, バイオインフォマティクス, ケミカルバイオロジーの融合プロジェクト－	継続
農学研究科 薬学研究科	食と健康の生理化学の創生－農・薬連携によるライフ・イノベーションプロジェクト－	新規
エネルギー理工学研究所, 化学研究所, 生存圏研究所, 防災研究所, 東南アジア研究所	生存基盤科学におけるサイト型機動研究の推進	継続
生存圏研究所 理学研究科	超高層大気長期変動の全球地上ネットワーク観測・研究	継続
フィールド科学教育研究センター	森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業	継続
⑤産学連携機能の充実		
野生動物研究センター	絶滅危惧野生動物保全研究の推進プロジェクト	継続
<b>【全国共同利用・共同実施分】</b>		
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点形成	継続
人文科学研究科	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	継続
再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続

部 局 名	事 項(事 業)名	新規・継続の別
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点形成	新規
生存圏研究所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成	継続
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	継続
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す大学横断型全国共同研究	継続
ウイルス研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合の共同研究拠点事業	継続
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	継続
数理解析研究所	基礎数理共同研究の推進	継続
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	継続
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	継続
東南アジア研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	継続
放射線生物研究センター	放射線生物学の研究推進拠点	継続
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	継続
地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続
野生動物研究センター	絶滅の危機に瀕する野生動物(大型哺乳類等)の保全に関する研究拠点	新規
【教育関係共同実施分】		
高等教育研究開発推進センター	教育能力向上に向けた実践的な研究と方策の構築	新規
特別経費関連 計	38件 内 訳 新規 9件 継続 29件	

### 病院特別医療機械設備(財政投融資設備)

部 局 名	事 項(事 業)名	新規・継続・更新の別
医学部附属病院	先進医療支援臨床検査システム	更新

(財務部)

## 部局の動き

### 宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月4日(火)、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースで新年互礼会が開催された。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に開始された本会は、今年で5回目となる。今年からは事務部職員も大勢加わり、宇治地区の一体感をより高める機会となった。

まず、開会の辞として、宇治地区部局長会議世話部局長である時任宣博化学研究所長から、今年、宇治地区耐震改修工事が完了することへの謝辞と、昨今の大学の財政状況や安全衛生面での諸問題を踏まえ、無駄のない効率的な教育・研究活動の推進と安全で安心な宇治キャンパス運営に協力願いたいとの新年の挨拶があった。

引き続き、次期宇治地区部局長会議世話部局長である防災研究所長の発声による乾杯の後、出席者

は和やかに懇談し、新年を迎えた実感を味わいつつ賑やかな会となった。



新年の挨拶を述べる時任化学研究所長

(宇治地区事務部)



## 寸言

## 京大で学んだこと

土屋 裕弘



昭和42年、故郷の松本を出て京大に入学。吉田西寮(旧京都織物女子寮で、現在の薬学部総合研究棟の場所)と吉田寮で、学生結婚までの通算5年半、寮生活を送った。1ヶ月の寮費はわずか100円、10,000円で生活費のすべてをまかなった。

昼まで寝て午後は実験、夜中の2時頃から寮生が私の部屋に集まって飯を炊き、信州の母親が送ってきてくれる自慢のつくだ煮、つけものをおかず空腹を満たした。当時は社会全体が激動の時代、政治・経済・社会のあり方を真剣に考え、討論し、それなりに充実した時代であった。とはいえ、冷暖房のない木造の建物では、夏は暑く蚊取り線香・蚊帳が、冬は寒く電熱器・火鉢が生活の必需品だった。全国各地から京都に集まった寮生との生活は、プライバシーはないが捨てたものではなく、たまに管理人さんのお宅にお呼ばれするなど、今は懐かしい思い出である。

大学院の5年間は、岡田寿太郎教授の薬品工学講座に所属。合成(気相反応、光反応)、反応工学、粉体工学、微量分析、構造活性相関など広範な研究領域から自分でテーマを選択。研究室の自由な雰囲気は、その後の人生に大きな影響を与えた。薬学は実学と言いながら、化学を純粋科学として探求した。よき時代であった。

昭和51年、博士課程を修了し、田辺製薬(現 田辺三菱製薬)に入社。歳を食った新入社員には、大学の同級生だった女房と2歳の長女がいた。研究所に配属され、引き続き有機合成研究に携わり、新薬創製を目指した。その後、経営企画部長、研究本部長などを経て、経営全般を担当。新しい仕事にはいつも新しい経験と新しい出会いがあり、何度も壁にぶつかりながらも、成長を実感することができた。

アンメット・メディカルニーズ(いまだ有効な治療法がない医療上の必要性)を充たし、新たな治療

の可能性を拓く新薬の創製は、製薬企業が生み出す価値の源泉である。新薬には、患者さん、ご家族、医療関係者のほか、多くの人の夢と期待が詰まっている。その夢を形あるものにするという、社会的に意義ある仕事に納得して取り組むことができた。

さらにその過程で、壁を乗り越えるため、多くの仲間と交わることができた。いい会社員人生を送らせてもらったと思う(註:まだ現役である、念の為)。経営者となった今、当社の社員が退職する時、「この会社で働けてよかった」と思える会社になりたいと真剣に考えている。

製薬企業には、研究開発、生産、営業、管理など多種多様な職務があり、さまざまな専門分野の人が働いている。よい薬を患者さんにいち早く届けるためには、これら多様な社員の「協業」が必須である。さらに、一企業にできることには限界がある。戦略的パートナーと、ウィン-ウィンのパートナーシップを構築することで価値が最大化する。強い個人(企業)が「協業」する時、競争力は更に強固になる。当社では、社員が自ら主体的に考え、行動し、意見をぶつけあえるような自由闊達な風土作りを進めている。そのことで協業が進み、会社は強くなると信じている。

京大の大先輩である故河合隼雄先生によれば、「自立」の反対語は「依存」ではなく「孤立」である。そもそも人は、誰かに依存せずに生きることは不可能であって、自立とは依存の排除ではなく、「必要な依存」を受け入れること、という。自立した個は、積極的に他者と協業し、事を成すのである。

自由な雰囲気の中で、目的に向かって知恵を絞り、闊達に議論して協業する。今振り返ると、私の価値観の源流は、京大での学生生活の中で経験し身につけたことにある。「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」と言った哲学者がいたが、私は幼稚園には行かなかった。私は経営に必要な知恵を京大で学んだ、のかもしれない。京大だから幼稚園より、はるかに高度なことを学んだ、はずだ。

私はいま、「京都大学で学んでよかった」と思っている。

(つちや みちひろ 田辺三菱製薬株式会社代表取締役社長 昭和46年薬学部卒業)

## 随想

## 『日中教育学対話』シリーズ3巻の出版

名誉教授 山崎 高哉

偶然の出会いが思いもかけぬ展開を示し、思わぬ成果となって実を結ぶことがよくあるが、今回出版した共編著『日中教育学対話』3巻は、そのような成果の一つである。



まだ京大在職中の2002年5月、私は、初めて中国を訪れた。図らずも北京師範大学教育学院の勞凱声教授(当時)から講演の依頼を受けたからである。その後、勞教授とはほぼ年1回の割りでお会いし、親交を深めた。2006年9月に北京師範大学で開かれた「中国教育哲学専門委員会」の「教育哲学国際シンポジウム」に招かれたときは、小泉元首相の靖国神社参拝をきっかけに政治面での厳しい対立が続いていたが、シンポジウムや懇親会の場で話し合ううちに、中国の研究者たちの多くが冷え切った政治的関係を超えて、共通の文化的基盤を数多く有する日中両国が研究交流を活発化することによって、学術・文化面での日中「和諧」を進めようという強い思いを抱いてくれていると感じた。そこで、私は、勞教授に「日中教育学対話」というテーマで共同研究し、その成果を出版し合おうと提案した。勞教授は、すぐに賛同して会合を開いて下さった。その話し合いで、日中の教育学研究や教育改革が今日直面している課題のうちに、いかに共通するものがあるかが分かり、日中共通のテーマ一つにつき、日中それぞれで1名ないし1グループで研究・執筆すること、できればシリーズ本とし、日中双方で出版することを申し合わせた。この共同研究には、中国からは、勞教授の仲介で中国教育学界を代表する17名の参加を得、日本でも13名の協力を得ることができた。

こうして、日中の教育学研究者が同じテーマで研究し、2国間対話を重ね、その成果を日中双方の教

育学研究や教育改革に新たな展望を切り開く『日中教育学対話』シリーズとして出版する作業を進めた。一方で、私は新たに独立行政法人日本学術振興会の2国間事業共同研究に申請し、幸運にも2008年度と2009年度の2年間の共同研究を認められた。この共同研究の主たるねらいは、日中双方で公開シンポジウムを開催し、共同研究者の忌憚のない率直な対話を通して、双方の教育学研究と教育改革の発展に寄与するとともに、日中双方の教育学研究者が相手国を訪問し、その教育の実情を視察し、かつ様々な人々と直接触れ合って、相互理解と相互信頼を進展させようというものであった。

この日中教育学対話は、2008年8月30日に佛教大学で開催された公開シンポジウムを皮切りに、同年11月2日と4日に開かれた北京師範大学と曲阜師範大学における公開シンポジウムでも行われた。2年目の日中教育学対話シンポジウムは、前年とは逆に、最初、中国において、2009年9月19日に北京師範大学、9月21日に首都師範大学において、そして、日本では同年11月21日に佛教大学で開催された。

この日中教育学対話の成果は、山崎高哉・勞凱声共編『日中教育学対話Ⅰ－教育学研究と教育改革の現状と課題－』(2008年9月)、『日中教育学対話Ⅱ－黄濟先生米寿記念論文集－』(2010年4月)および『日中教育学対話Ⅲ－新たな対話への発展・深化を求めて－』(2010年12月)として春風社から出版された。この3巻は2011年中に中国においても翻訳出版される運びになっている。

勞凱声教授(現在は首都師範大学教育科学学院首席專家教授)との偶然の出会いから始まった日中教育学対話を通して、私は、いささかなりとも学術交流の実を上げ得たのみならず、中国の多くの人々との魂の触れ合いを経験することができたことと喜んでい。同時に、私は、勞教授との出会いを偶然とは思えぬ運命的な「実存的出会い」とも感じている。

(やまざき たかや 平成15年退職 元教育学研究科教授、専門は教育学)

## 洛書

過去から繋がる現在、そして未来へ：  
宇宙も自分も

長瀧 重博



我々地球を取り巻くこの大宇宙は、かつて高温の火の玉のような状態にあり、全ての素粒子がほぼ一様に混ざり合うスープのような存在であったと考えられています。しかしやがて宇宙誕生時に産まれたと考えられるスープの中のわずかな揺らぎが、自身の持つ重力により収縮を始め、最初の星、最初の銀河が形成されます。以降、この大宇宙には様々な天体が生まれ、そして死を迎え、それは今なお続いています。我々の地球や、母なる太陽、そして太陽系の仲間たちも、宇宙を構成する天体のひとつとして存在しているのです。この大宇宙そのものの歴史が神秘であり、そして大宇宙を構成する様々な天体現象は謎に満ち溢れています。しかしながらそれを神秘とせず、人智を超えた謎とせず、人類の叡智を以ってこれの理解にあたる学問を宇宙物理学と呼びます。そして、私はひとりの理論宇宙物理学者です。

遙かなる大宇宙に興味を持ち、私は大学院で宇宙物理学を専攻しました。この謎を少しでも深く理解したいと、机に向かって勉強する毎日でした。大学と大学の傍に借りたアパートを毎日往復し、勉強を続けました。読むべき本は無限のようにあり、宇宙の謎の解明は更にその先にあると知りながらも、自分の知識が増えていくこと、理解出来ることが増えていくことを実感するのは楽しいものでした。大学院では勉強(インプット)だけでなく、研究(アウトプット)へ繋げるトレーニングも行いました。指導教官や同じ研究室の皆さんからのアドバイスを受けながら、やはり毎日大学とアパートを往復し、大学にある自分のパソコンに向かい、コンピューターのプログラミングを行いました。学んだ知識をベースにじっくり自分のパソコンに向かって価値を創り上げる、いわゆる“メーカー”とも言うべき作業だったように思います。

この大学とアパートの往復、そして大学で毎日少しずつ何かを学ぼうとすること、何かを産みだそうとする作業は、今も続いています。大学院時代から

現在に至るまで、その営みは連続的に繋がっている筈のものなのです。しかし今の私の研究の様子は、大学院時代とは随分違って来ています。昨今は研究の打ち合わせに於けるメールのウエイトが高まりました。海外の共同研究者はもちろん、日本人共同研究者もその殆どは京都ではなく、日本各地や世界に拠点を持っておられるからです。メールで足りない時にはインターネット(スカイプ)やTV会議システムを使うこともあります。これら世界中に散らばる共同研究者が、それぞれ独自のスキルを持っており、それらを組み合わせることで時に大きな価値を産み出すことがあります。優れた組み合わせ(コラボレーション)を提案し、提案し、実現していく作業は、“商社マン”に近い仕事と言えるかもしれません。

これら得られた研究成果は論文として公表されるだけでなく、国際会議等で宣伝されていきます。こういった会議にて、世界各地にいる共同研究者達と顔を合わせ、各人の発表ぶり(それは研究者にとっては晴れ舞台です)を、感慨と共に聞きます。ほんの数年前には知らなかった海外の共同研究者の発表を、ある意味ハラハラしながら聞いている自分に驚きを感じたりしています。国際会議ではもちろん共同研究者のみならず、新たに知人が出来ること、そしてそれが将来何かに繋がるかもしれないことへの期待もあります。最近是我自身が国際会議を開催し、皆さんの晴れ舞台を用意することにも取り組んでいます。そういった類の仕事は“演出家”の仕事に近いのかもしれません。

大学院に入った当時、自分の研究者像は明らかに“メーカー”に近いものがあり、決して自分が“商社マン”や“演出家”に近い仕事をするイメージはありませんでした。このような自分の予想に反した、わくわくするような展開が現れたことは、自分の人生にとって嬉しい誤算でした。そして今後も、きっと今の自分が想像していないような類の仕事のあり方が、自分の前に現れるという予感があります。もちろん全ての基本は自分を含めた共同研究者個々の“メーカー”としてのスキルにあるので、そこを疎かにするようでは全てが根底から崩れてしまうことでしょう。これからも毎日毎日、大学とアパートを往復しながら足元を固めて、今後の展開と、それがもたらす宇宙の更なる理解に期待しています。

(ながたき しげひろ 基礎物理学研究所准教授、専門は宇宙物理学)

## 話題

## 東南アジア研究所において東南アジア10カ国のASEAN常駐代表と山田ASEAN担当大使との意見交換会を開催

平成22年12月20日(月), 東南アジア各国のASEAN常駐代表(大使級)10名および我が国の山田滝雄ASEAN担当大使(本学法学部卒)が東南アジア研究所を訪問され, 松本 紘総



開会の挨拶を行う松本総長

長, 吉川 潔, 赤松明彦両理事・副学長, 森 純一国際交流推進機構長のほか, 木村雅昭京都産業大学教授および永井史男大阪市立大学教授に出席いただき, 清水 展東南アジア研究所長をはじめ研究所員等を交えて意見交換会を行った。

意見交換会は, 本名 純立命館大学教授の司会のもと, 松本総長による挨拶に続いてプー・ダン・ドゥ

ンASEAN常駐代表委員会委員長(Committee of Permanent Representatives)(ベトナム)からの挨拶の後, 白石 隆総合科学技術会議議員(日本貿易振興会アジア経済研究所長, 京都大学名誉教授)の基調講演が行われた。

白石氏による基調講演では, ASEAN諸国での中長期的な経済成長の違いおよび都市化の違いにより二極化が進行していることに加えて, 80年代以降の東アジアにおける共同体構想の変遷について触れられた。続いて, 2008年以降, 再びアジア太平洋共同体という発想が強くなっているとの指摘があった。

基調講演の後, 活発な意見交換が行われ, ASEAN常駐代表から日本のASEANへの強いコミットメントの継続を求める声などがあがった。

会場にはフロアいっぱいに大学院生や研究員が詰めかけ, 盛会のうちに終了した。



意見交換会の様子

(東南アジア研究所)

## 平成22年度日本学術振興会拠点大学交流事業「都市環境」コーディネーター会議を開催

工学研究科で実施している日本学術振興会拠点大学交流事業「都市環境」に関連し, 1月14日(金), 桂キャンパスにおいてコーディネーター会議が開催された。

会議には, 日本側から津野 洋教授, 北田敏廣豊橋技術科学大学教授, 武田信生本学名誉教授, 小林潔司教授, 高岡昌輝准教授, 松島格也准教授, 井上耕治講師, 富士田誠之講師および事務職員が出席し, 中国側からはHUANG Xia教授, WANG Wei教授, WANG Chengwen教授, JIN Yiyang准教授, MA Yongliang准教授, WANG Yuxuan准教授, WU Ye准教授およびGAO Yuhua秘書が出席された。

本事業は今年度が最終年度であることから, 会議では今年度の交流実績を含めた, これまでの10年間

の活動実績を振り返るとともに, 共同研究の成果となる書籍の出版に関して, 活発な議論が行われた。両国の研究者は, 互いに今後も密接な協力関係を維持していくことを確認し, 閉会した。



コーディネーター会議の様子

(大学院工学研究科)

## FDのためのビデオ教材「FDを“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」を開発

情報学研究科の辻 高明特任助教は、昨年度制作したFDのためのビデオ教材①「大学教員向けティーチング・ティップス集」\*に続き、今年度、FDのためのビデオ教材②「FDを“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」を開発した。本ビデオは、NHK関連団体の協力を得て進めている「FDのためのビデオ教材」シリーズの第2弾である。

本ビデオ教材は、教員団の集団的教育活動に埋め込まれたFDの発見促進のために制作したDVDである。本DVDでは、FDを授業改善だけに限定的に捉えるのではなく、教員の集団的教育活動の中に発見することの意義を訴えかけている。

本編では、まず辻特任助教が問題提起し、続いて情報学研究科におけるフィールド情報学研究会の教員たちによる教科書作りと、それを活用した教育活動について紹介している。次に辻特任助教のほか、子安増生教育学研究科教授(グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー)、山本行男人間・環境学研究科教授(前高等教育研究開発推進機構長)および後藤忠徳工学研究科准教授の4名が参加した対話ワークショップのダイジェスト版が紹介されている。子安教授からは京都

大学心理学連合の心理学教員による心理学概論のテキスト作りについて、山本教授からは人間・環境学研究科を中心とした化学教員による「化学実験操作法・動画資料集」作りとそれを活用した教育活動について、後藤准教授からは工学研究科教員による工学部地球工学科の実習・演習授業の共同的な実施体制についての話題提供がなされ、その後4名で活動に埋め込まれたFDの発見についての全体対話となっている。

本ビデオが議論誘発装置となり、教員たちの間に日常的な集団的教育活動に埋め込まれたFDの発見について、議論が生成されることが期待される。

\*アナウンサーの話し方や伝え方の技術を教員の授業力向上に活かそうと制作したDVD教材。FDビデオ教材①は、学内の25部局の教員からの送付依頼があった。

FDビデオ教材②の送付を希望される方は以下まで。

辻 高明(情報学研究科)  
tsuji.takaaki.4v@kyoto-u.ac.jp  
(併せてFDビデオ教材①も送付可)



FDビデオ教材①「大学教員向け ティーチング・ティップス集」



FDビデオ教材②「FDを“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」

(大学院情報学研究科)

### 第3回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院は、第3回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を1月21日(金)に芝蘭会館にて開催した。同研究会は、当院におけるiPS細胞, ES細胞, 体性幹細胞等を用いた再生



開会挨拶をする中村病院長

医学研究の向上並びに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に設置されたものである。第3回目となる今回の研究会では、学内外から100名余りの参加があった。

研究会では、中村孝志病院長による開会挨拶の後、中川隆之京大病院耳鼻咽喉科講師より「多能性幹細胞を用いた内耳再生医療開発」、長船健二iPS細胞研究所准教授より「iPS細胞技術を用いた腎疾患に



中内センター長による特別講演

細胞治療部教授・分子細胞治療センター長より「わが国における細胞治療・再生治療の制度的枠組みについて」と題する一般講演が行われた。

引き続き、中内啓光東京大学医科学研究所幹細胞治療研究センター長より「細胞治療から臓器再生治療へ:iPS細胞から臓器を作る」と題する特別講演が行われた。

(医学部附属病院)

### 経営管理大学院が講演会「会計検査院の仕組みと機能」を開催

経営管理大学院では、1月22日(土)、法経済学部東館大会議室において、「会計専門職の学び直しを支援する短期集中教育プログラム」(文部科学省委託事業)の一環として、講演会「会計検査院の仕組みと機能」を国際公会計学会およびみずほ証券株式会社の協賛により開催した。



基調講演を行う大塚氏

現在、国の財政難が深刻化し、会計検査院の持つ役割への関心が大いに高まっている。本講演会は、大塚宗春早稲田大学商学学術院教授(元会計検査院長)をお招きし、会計検査院の基本的な理解を深めると共に、行政や自治体の事業評価の在り方から大学予算についてまで幅広く議論を行うことを目的として開催した。

小林潔司院長の開会挨拶に始まり、大塚氏による「会計検査院の仕組みと機能」と題した基調講演が行われた。講演では、大塚氏により元会計検査院長ならではの観点から、会計検査院の組織構成や検査の内容などについて分かりやすくお話しいただいた。

後半は、徳賀芳弘教授の進行のもと、大塚氏と西阪昇理事・副学長との対談が行われた。「会計検査

院改革」「会計検査院検査の変化」「国立大学法人の検査」「国立大学法人の経営」の4つのテーマについて、大塚氏が会計検査院の改革に尽力されたお話や、国立大学法人の在り方、現在ある問題点にも踏み込んだ対談が行われた。

対談の最後には、参加者から事前に聴取した質問に答える形で質疑応答が行われ、全体を通して内容の深い講演会となった。

結びには、佃弘一郎日本公認会計士協会京滋会監査・会計委員会委員長により閉会の挨拶が行われた。満席となった会場には公認会計士や公務員、学生等50名が参加し、講演会を通して熱心に聴講され、盛会のうちに終了した。



大塚氏と西阪理事による対談の様子

(経営管理大学院)

## 京大ベンチャーズ「スタートアップ研修会」ーベンチャー成功の条件を考えるーを開催

1月28日(金)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL:松重和美施設長(工学研究科教授))において、京大ベンチャーズ入居企業・団体関係者、経営を志す学生、就職活動前の学生などを対象に、「京大ベンチャーズ『スタートアップ研修会』ーベンチャー成功の条件を考えるー」を開催した。

前半は、講演1「創業のメリットとスタートアップ戦略～現在の金融経済状況を踏まえて」(竹本拓治福井大学産学官連携本部特命准教授)、および講演2「法人設立手続きと事業計画の立案について」(梅原克彦公認会計士)を行った。後半は、前半の講演を踏まえ、ワークショップ「ベンチャー成功の条件を考える」を行った。ワークショップは、京大ベンチャーズ入居の3社(株式会社日本情報化農業研究所、GEEKS株式会社およびグリーンロードモーターズ株式会社)の代表がプレゼンテーションを行い、2名の講演者および参加学生からの質問の後、参加学生がベンチャーズ3社に対して模擬投資を行うという内容であった。模擬投資の金額は、参加学生の投資額に対して、講演者がプレゼンテーションを評価した係数が掛けられ決定された。

京大ベンチャーズ3社の熱のこもったプレゼンテーションに対して、参加学生らは鋭い質問を投げかけ、起業さらにその後の事業展開について、意義深い議論が交わされた。ワークショップの終わりには、2名の講演者からのコメントも寄せられ、ベンチャー起業に対して多面的に考える大変良い機会となった。

研修会後の交流会では、学生がベンチャーズ関係者や講演者らと歓談し、起業のみならず将来のキャリア戦略にまで話が及び、参加学生らのモチベーションの高さを感じられた。



ワークショップの様子  
(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

## 京大生がつくるキャンスマップ「Welcome! 京大」配布開始

この度、外部戦略室では、第二期重点事業実施計画事業「戦略的情報発信強化事業」の一環として、本学での大学生活にあこがれてキャンパスを訪れる中・高校生に向けたキャンパス案内冊子を作成した。



この冊子は9名の現役学生が「初めて京大を訪れる人たちにも、キャンパスでの学生生活の魅力を感じてもらいたい」との思いを込めて企画・編集したものである。学生の口コミによるお勧めスポットを掲載するなど、キャンパスでの学生生活の雰囲気を中・高校生にイメージしてもらえる内容となっている。

構内インフォメーションセンターなどで無料配布しており、学生・教職員にはキャンパスを訪れた中・高校生を案内する際に活用してもらいたい。

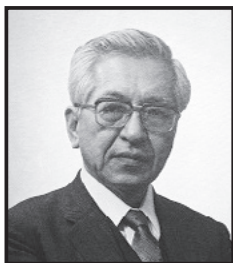
※本件についての問い合わせ先  
外部戦略室 TEL075-753-2602  
welcome@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

(外部戦略室)

## 訃報

このたび、近藤<sup>こんどうぶんじ</sup>文治名誉教授、北丸<sup>きたまるりょうぞう</sup>竜三名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

## 近藤 文治 名誉教授



近藤文治先生は、1月4日逝去された。享年90。

先生は、昭和18年9月京都帝国大学工学部を卒業され、同大学大学院に進学の後、同20年9月京都帝国大学工学部講師に採用された。昭和22年12月京都大学工学部助教授に昇任、同32年1月教授に昇任された。昭和59年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、京都大学工学部附属オートメーション研究施設長などを併任のほか、昭和44年4月より同45年11月まで京都大学評議員を、同48年4月より同50年3月まで京都大学工学部長を併任された。

また、昭和51年5月より同53年5月まで日本自動

制御協会(現システム制御情報学会)会長を、本学退官後も大阪電気通信大学教授、学長、理事長を務められた。

先生は、電気回路過渡現象の解析、デジタル微分解析機・有限時間整定系などに基づく電子応用装置・電子制御の実用化、適応制御系の研究などを通し理論的手法を自動制御工学の研究に導入するなど多大な貢献をされるとともに、生体医用工学への応用において先駆的業績を挙げられた。また、大学のみならず、応用科学研究所理事長、京都府中小企業総合センター所長等を務められ、産業界における人材育成にも尽力された。

これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成6年4月勲二等旭日重光章を受けられた。

(大学院工学研究科)

## 北丸 竜三 名誉教授



北丸竜三先生は、1月10日逝去された。享年86。

先生は、大正13年7月8日京都市に生まれ、昭和22年9月京都帝国大学工学部繊維化学科を卒業された。三菱化成株式会社勤務の後、昭和24年4月から同31年3月まで京都大学大学院(工学部)に在学、同年7月京都大学化学研究所助手に採用され、同35年12月助教授、同51年3月繊維化学研究部門担当教授に昇任し、同62年5月部門の転換により材料物性基礎研究部門を担当された。その後、昭和63年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。京都大学退職後は、平成元年4月龍谷大学理工学部教授に就任され、同5年3月定年退職、その後、同大学理工学部教授(特別任用教員)として勤務し、同7年3月退職された。

この間、先生は天然および合成繊維の改質、合成繊維の製造、高分子固体の構造と物性に関する広い研究分野で、また、核磁気共鳴法、中性子散乱法など最新の測定法を駆使した基礎研究で優れた業績を挙げられた。特に、固体高分解能核磁気共鳴法による高分子の固体構造に関する業績は、国際的に高く評価され、度々国際会議で招待講演を行い、海外出版の成書へ寄稿された。また、京都大学大学院工学研究科高分子化学専攻の指導教授として大学院生の教育、研究指導を行うと共に、学外においても、名古屋大学、福井大学、京都工芸繊維大学、岡山大学、九州大学、滋賀医科大学などで非常勤講師として講義を行い、多くの優れた人材を育成された。これらの卓越した業績により、平成14年11月勲三等瑞宝章を受けられた。

(化学研究所)



## グローバル COE プログラム紹介



**プログラム名称：**地球温暖化時代のエネルギー科学拠点  
-CO2ゼロエミッションをめざして

**拠点リーダー：**エネルギー科学研究科教授 八尾 健

**申請分野：**学際・複合・新領域 **研究分野：**総合工学

**申請部局：**エネルギー科学研究科，工学研究科，エネルギー理工学研究所，  
原子炉実験所

### はじめに

エネルギーの確保並びに環境の保全は、人類の持続的な発展のための最も重要な課題です。これまで、人類は必要とするエネルギーの大部分を化石燃料に依存し、二酸化炭素に代表される温室効果ガス(以降総称してCO2という)を大量に排出してきました。近年地球温暖化による気候変動が容易に認識されるまでに進行し、その原因としてCO2排出がほぼ確実視される事態に陥っています。CO2排出を如何に抑えるかが、世界にとって喫緊の問題になっています。しかし、エネルギー問題は、単に技術だけの問題ということではできず、そこには社会や経済の要素も大きく関係してきます。したがって、理工学に社会科学と人文科学の視点を加えた学際・複合領域としての「低炭素エネルギー科学」の確立が必要になると考えられます。

本プログラムは、2100年までに、化石燃料に依存しないCO2ゼロエミッションエネルギーシステムに到達するシナリオの実現に向けた、技術の創出・政策提言を行い得る教育者・研究者・政策立案者を育成する国際的教育研究拠点形成を目的としています。この拠点では、学生自らがシナリオ策定への参加を通して、他分野研究者との相互交流を体験し、「エネルギーシステム」全

体を俯瞰する能力を獲得し、更に各専門研究へ反映するものであり、これは人材育成の大きな特徴となっています。

CO2を排出しないエネルギー科学研究として、まず元栓を締めなければならないとの観点から1次エネルギーに注目し、再生可能エネルギー(太陽光・バイオマス)、並びに核分裂や核融合による先進原子力エネルギーを対象としています。エネルギー問題は単に技術だけの問題ということではできず、社会や経済の要素も大きく関係するので、エネルギー社会・経済の研究も推進しています。

### 拠点の全体像

本プログラムの実施に当たっては、中心に教育を行うGCOE教育ユニットを据え、シナリオ策定

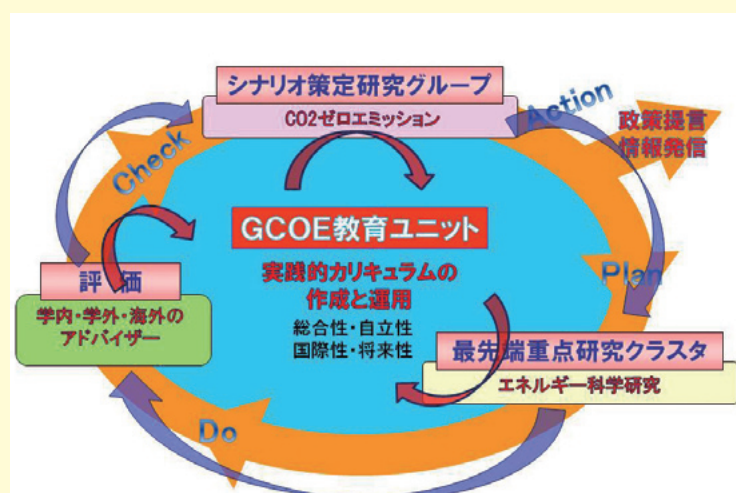


図1 拠点の全体像

から、最先端重点研究，評価と互いに関連させながら推進しています。

シナリオ策定研究グループでは、CO2ゼロエミッション技術ロードマップの作成並びにCO2ゼロエミッションシナリオの策定を行っています。社会の価値観や人間行動学の面からも分析を進めています。この結果を最先端重点研究クラスターに還元し、教育や研究推進に反映します。本プログラムでは、低炭素社会を実現するエネルギーシナリオの策定を長期的かつ国際的に試みることであります。このような大規模なシナリオ策定には、各界の意見や協力が必要です。産公学民が共同してエネルギー・環境問題に取り組むことを目指し、グローバルCOEシナリオ研究委員会と企業との情報・意見交換を行う場として「エネルギーシナリオ・戦略研究会」を立ち上げました。研究会では、定期的に意見交換の機会を設け、シナリオ委員会が提案する技術ロードマップ並びにエネルギーシ

ナリオの評価を行い、これをシナリオ作成にフィードバックしています。

研究を通じた教育の場として、最先端重点研究クラスターを設け、エネルギー社会・経済研究、並びに、太陽光エネルギー研究、バイオマスエネルギー研究、および先進原子力エネルギー研究をシナリオ策定研究グループのロードマップに連携させて推進しています。このクラスターに教育ユニットの学生が参画し、研究推進の中核となる人材の育成を行っています。シナリオ策定研究と最先端重点研究を相関させ、CO2ゼロエミッションエネルギーシナリオ策定研究に関連して研究を進めています。

評価においては、学内、学外、国外のアドバイザーとの意見交換を通じて、シナリオのチェック、教育、研究の見直しを行い、プログラムを推進しています。

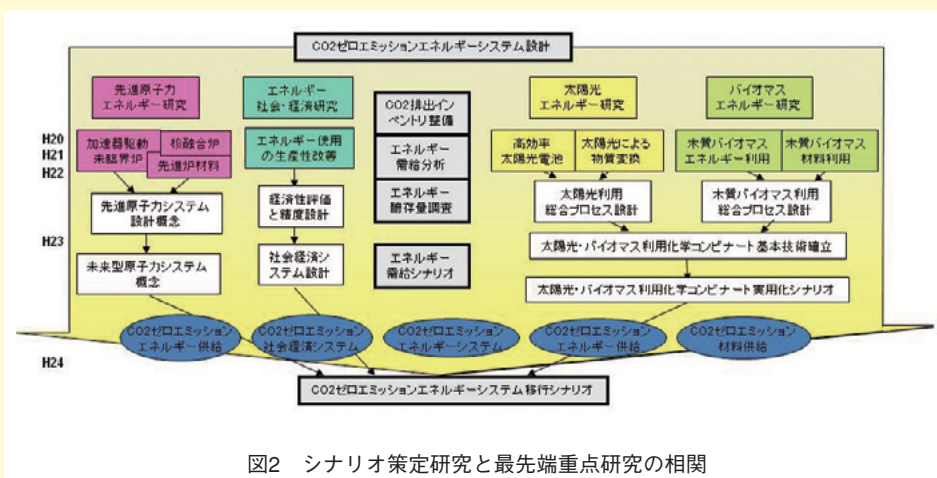


図2 シナリオ策定研究と最先端重点研究の相関

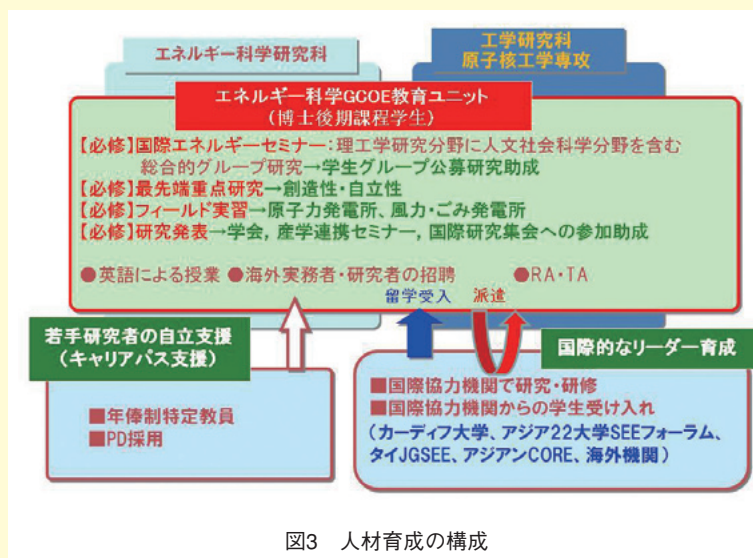
## 教育体制

本プログラムの中心課題である教育においては、エネルギー科学GCOE教育ユニットを設置して博士後期課程学生を選抜し、CO2ゼロエミッションの実現に向けた人材育成を目指した「CO2ゼロエミッション教育プログラム」を提供しています。この教育プログラムは、独自のカリキュラムを構成し、理工学研究分野に人文社会科学研究

分野を含む、CO2ゼロエミッションに向けた総合的なグループ研究を、研究費を支給して、自主的に企画実施する「国際エネルギーセミナー(公募型グループ研究)」, 最先端重点研究クラスターに独立した研究者として参加させ、創造性・自立性を修得させる「最先端重点研究」, 原子力発電所, ごみ発電所等, リアリティのあるフィールドに派遣し、問題の本質を実地に学習させる「フィールド実習」, 国際学会や産学連携セミナー, 並びに国

際研究集会で発表する「研究発表」を必修科目としてしています。また、国外機関における「海外研修」や英語による講義等を実施しています。さらに、国際会議や国内外の学会等への参加旅費の助成を行い、自発的な研究企画能力、国際的視野、コミュニケーション能力等の育成を図っています。「国際エネルギーセミナー(公募型グループ研究)」では、留学生と日本人学生が同じグループに属し、討論、

レポート作成、発表を、すべて英語で行っています。国際サマースクールや中国ハルビン工科大学並びに韓国アジョウ大学との学生合同シンポジウムなどをユニットの学生が中心になって企画・運営し成功させています。ドイツのエアランゲン大学とは、定期的に学生シンポジウムを行っています。特に優秀な学生をRA, TAとして採用して研



さらに、国際公募により、年俸制特定教員、特定研究員を採用し、シナリオ策定あるいは最先端重点研究に独立した研究者として参加し、実践力を習得するとともに、学生の研究演習指導を行い、教育者としての能力を養成しています。

### 連携活動

学生・教員の国際交流、研究成果の発信を推進するため連携委員会を設置し、国内・国外の研究機関との交流・連携、東アジアや東南アジア諸国



図4 第1回国際シンポジウム「ZERO CARBON ENERGY Kyoto 2009」集合写真

への成果の波及活動、国際、国内シンポジウムの開催、ホームページの運営、和文・英文広報、年4回の和文・英文併記のニュースレターの発行等を行っています。毎年開催しているグローバル

COE国際シンポジウムの研究発表を取りまとめ、“Zero-Carbon Energy”シリーズの市販本として、シュプリンガー社から出版しています。さらに本プログラムでは、ASEAN諸国と共同で推進し



図5 拠点の出版物

ている持続可能なエネルギー環境フォーラム：SEE(Sustainable Energy and Environment) Forumを、主導的に運営しています。この会議では、各国の研究代表者が集い、国際共同研究推進のためのNetwork of Excellences (NOEs)を設

立し、国際共同研究を開始しています。また原子力分野では、タイ原子力セミナーを企画・実施し、毎年日本から講師を派遣しタイ国で原子力についての講義を行っています。

(エネルギー科学研究科教授 八尾 健)



図6 Network of Excellences (NOEs) 会議